

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

■30周年、新たな出発に向けて	1
■「SDGsよこはまCITYサイドイベント」からのレポート	2,3
■支援地から(ネパール)	4
■支援地から(ラオス)	5
■支援地から(カンボジア)	6
■第20回「南北코리아と日本のともだち展」開催に寄せて	6
■ミャンマーでのクーデターと日本の資金(メコン・ウォッチ寄稿)	7
■インフォメーション/活動日誌	8
■編集後記	8

30周年、新たな出発に向けて ～ これからの海外支援を考える ～

地球の木が1991年に設立されて今年で30年になった。

1990年代からこれまで、社会は大きく変化した。富める者と貧しい者との格差の増大、金融危機、気候変動、災害、そして今なお広がり続けている新型コロナウイルスなどの疾病。また、弱者への社会的排除により、多くの難民が世界を漂流している。日本でも少子化による労働不足もあり、多くの外国籍の人たちが来日している。これからさらに厳しい社会状況が予想されている中で私たちはどのように考え、活動をしていくのか。

地球の木は現在ネパール、ラオス、カンボジアで、弱い立場にある女性や子どもたち、少数民族を対象に自立支援を行っている。その情報は都度お知らせしている通りであるが、第6次3カ年計画(2019～2021年度)で、現行の海外支援プログラムの見直しをしようと2019年度から理事会を中心に話し合いを始めた。見直しの理由として、「ネパール、ラオスの支援プログラムが開始から既に10年以上たっていること」、「これからの海外支援について地球の木の目指すことや役割、内容を社会状況の変化や経験等を踏まえて改めて検討する時期になっていること」、「支援を充実させるために地球の木の組織体制を検討する必要があること」があげられた。

2019年度から2年間の話し合いを重ねる中、2月にネパールのパートナーNGO・SAGUNから新しい村でのプログラム提案を受け、また、JVCラオスでは9月以降に新規プログラムの調査を開始することになった。2021年度は、これらの新プログラムと現行のカンボジアプログラム、また、新しい国や地域での支援も含めて、「検討会」でさらに検討を進めていく。

ネパールSAGUNから提案されている新しい村でのプログラム概略は、ロシ地域での活動成果をモデルに、村や地域づくりを担う人を育てる質の高い教育に特化したものである。これによ

り「幸せ分かち合い」をベースとした人や自然との関係づくり、出稼ぎにたよらない地域づくりができることを期待したい。

新しいプログラムは、日本から資金的に支援するだけでなく、支援地のことを私たちも自分ごととして共感を持つことができ、また、支援地での村づくりを進めると同時に、私たちの暮らす地域を市民主体で変えていく国内活動に生かせるような支援プログラムとしていきたい。

地球の木は、生活協同組合(生活クラブ生協)の組合員により海外協力を目的とした活動団体として設立された。社会の課題に向き合うためには多様な主体が求められる。地球の木もその一つであり、世界中の多くの人たちが連帯して取り組むことで、共生また平和や人権、自由、民主主義等が守られていくと考える。これらは地球の木の支援地におけるプログラム推進にもつながるものであり、国内における「多文化共生の地域づくり」も同様である。誰もが尊重される地域社会づくりのために、ともに力を合わせ活動していきたい。(副理事長 大嶋 朝香)



ネパールの支援村にて

2月20日
オンライン
イベント

「SDGsよこはまCITY—国際協力・多文化共生からのアプローチ」に参加

「SDGsよこはまCITY」は、毎年、春と秋にリアル開催されてきた「よこはま国際フェスタ」と「よこはま国際フォーラム」のイベントを合体させたもの。主催は、横浜NGOネットワークやJICA横浜などが構成する「よこはま国際協力・国際交流プラットフォーム(よこはまCプラット)運営委員会」。地球の木はそのサイドイベントに参加、オンラインセミナーとして、地球の木の活動をビデオで伝え、カンボジアのクラフト生産者の紹介やクラフト品の販売も行いました。そしてトークイベントとして「多文化共生の地域づくり」の連続講座第4回目をこの中で開催しました。概要を以下に報告します。

— 第4回 多文化共生の地域づくり連続トークイベント — せいしろう 「聖嬰さんに聞いてみよう！」～外国につながる子どもたちの教育と進路～

自宅から参加の聖嬰さんは、たくさんの質問にゆったり答え下さいました。司会は丸谷士都子さん(多文化共生の地域づくり準備会)。

中学を卒業して来日

中国瀋陽市出身の白聖嬰さんが、中学を卒業して、両親と一緒に暮らすため来日したのは2011年3月。知り合いも友達もなく、家に閉じこもって3ヵ月がたったある日、アイスが食べなくなるとコンビニに行く。何とか買えたのですが、その時思ったそうです。「これはまずい。日本語を勉強して高校に行きたい!」と。それから「あーすぶらざ」の教育相談に行きフリースクールに通うこととなります。日本語と教科の勉強もそこでして、県立鶴見総合高等学校に入学しました。

大学時代のボランティア活動

その後、神奈川大学外国学部に進学しますが、在学中はびっくりするほどのボランティア活動をされています。外国籍県民かながわ会議委員、外国につながる中学生へのサポート、大学生の交流のための「多文化ユースプロジェクト」を仲間と立ち上げるなど。それはどんな思いからだったのでしょうか。

まず自分の後輩たちがどうしているか気になって高校に行ってみよう。分かったのは「どうしてもみんなが日本語を勉強しなくなる」こと。神奈川県には中国人が大勢いて、学校でも日本語を使わなくて済んでしまう。これからは日本に住み、ここで進学したいのなら日本語を勉強しないとダメだよ、と言ってもなかなかわかってもらえないという。ボランティア活動で知ったブラジルやフィリピンをルーツに持つ子どもたちの事も「もっと孤独です」と心配する。日本の人たちの外国人のイメージは留学生か労働者で、親の都合で来た子どもたちのことはあまり知られていません。自分もつらい思いをたくさんしてきたが、それは後から来る子どもたちにも続かわけで、「日本に来てよかった」と思えるよう、何とかしてあげたい気持ちです。

市役所に就職・言葉は大事

昨年からは市役所で働く聖嬰さんですが、最初は外国にルーツ



白聖嬰さん

をもつ子どもたちを教える教師になりたかったそうです。先輩に「子どもだけでなく、日本に暮らす外国籍の人たちが直面する課題を知るには、行政職員になるのがいいのでは」と言われたのが大きかったとのこと。司会の丸谷さんが自分の体験談として「片言の言葉だけで人を判断してはいけないと強く思った」と話しをすると、聖嬰さんもこんな話を。電話に出ると「あんた外国人でしょ、日本人に代わって」と言う人や、外国人だからと、窓口で私の説明をさえぎる人もいる。どうしても簡単な日本語を使いがちで、「ちょっと子どもっぽくない」と思われたりもする。働き出して1年、社会は厳しいですね、と笑う。

～ 交流タイム～

ひと通り聖嬰さんの話を聞いた後は、このトークイベントに参加している人達との交流タイムになりました。

まず聖嬰さんから「初めて会った外国人が困っていたら声を掛けますか」と問われて複数の参加者から「誰でも困っている人がいれば声をかけます」との答えが。にこやかな表情の聖嬰さんに誘われるように参加者から意見や質問が出ました。

★聖壘さんの母校で日本語を教えています。自分の意志でなく親の都合で連れて来られた子たち、そして中国人コミュニティができていて日本語を話さなくても済む環境にいる子たちがどうしたら目的意識を持って勉強するようになりますか？



先生やボランティアの人たちがどれほど一生懸命になっても、かえって逆効果で、反感を抱くことがとても多いという事をみえています。そういう子たちには同じ境遇の、ロールモデルとしての先輩の存在が大きいと思います。

★外国につながる人たちを支援する団体で活動していますが、長い間には私たちが支援してきた子たちがいつの間にか後輩の力になり、共に学び合うつながりができてきているのを嬉しく思います。

★ネット上には多言語での情報がたくさんあるのに必要な人に必要な情報が届かない。とてももったいない。日本語ではなく、母語で検索して簡単に必要な情報が得ることができるように、共に努力しましょう。

★母語を豊かにするために日頃からしていることは？



好きな歴史の本や小説を中国語で読んでいます。ただ、今でも難しい話をする時には中国語でまず考えて日本語に直して口に出します。深く考えるのには言葉が必要で、幼い時に来た子たちは中国語も日本語も中途半端なので、難しいと思います。

★日本語を学びたくないという子たちの理由を考えることも大事だと思うのですが。



中国では愛国教育がなされており、日本や日本人に対する中国人が抱くイメージは悪く、それも原因の一つだと考えられます。でも私の場合、日本に来てたくさんの人たちに親切にしてもらって考え方がすっかり変わりました。最初に会う日本人、ボランティアの存在はとても大きいと思います。彼らにもそういう出会いをたくさん経験してもらいたいと思います。

* * *

たくさんのことを学んだ話し合いです。「一人でも多くの人たちに伝えてもらえたら」と聖壘さんと参加者の一致した思いでした。

「地球の木」紹介ビデオを刷新して配信

「科学技術や経済の発展で人は幸せになったと思っていました。しかし、それが富める者が富み、貧しい者はますます貧しくなる格差社会を引き起こしました」のナレーションで始まる画面は、大きな文字と豊富な写真で、現代社会が抱える諸問題に触れながら、地球の木の活動を分かりやすく紹介しています。そしてそれは、地球の木がこれまで一貫して問い続けてきた「本当の幸せって何だろう」という疑問をより鮮明に力強く発信するものとなりました。



紹介ビデオより

カンボジアクラフトの紹介



クラフトの生産者たち

地球の木が支援活動として販売を行っているカンボジアクラフトの4カ所の工房と製品を紹介しました。伝統的な織物技術の継承に力を入れている工房ではスカーフ、また別の工房では資源の無駄をなくし、新たな価値を生み出すアップサイクルという理念のもとにバッグをつくるなど、それぞれ工夫を凝らして独自のクラフトを製作しています。

地球の木は、生産者のバックグラウンドを知り、顔が見える関係を大切にしてきました。地雷被害者、ポリオ障がい者、シングルマザー、貧困地域に暮らす人々など、社会的に厳しい状況にある人達が生産に携わり、技術を身に付け自立できることを目指しています。

クラフト生産に関わるようになって生まれた彼らの夢を少しでも後押しできればという気持ちを伝えるようにしました。

(会報作成チーム 斎藤 和子・浜辺 美英子)

SAGUNマハントさんからの現地報告

コロナのため延び延びになっていた、マンガルトールでの集会在10ヵ月ぶりに実現できたのは1月末のことでした。今回は奨学生・元奨学生との集会、小学校教師トレーニング、ヤギ飼育グループとの話し合いを行いました。

元奨学生との集会

昨年3月、地球の木から3名が参加して元奨学生の聞き取り調査を実施する予定でしたが、コロナ禍のため延期になりました。今回もロックダウン明けで多くの参加者を集めることはできませんでしたが、奨学生・元奨学生18名と先生3名、学校運営委員会代表が集まり、生の声を聴くことができました。



奨学生・元奨学生との集会

地球の木はこれまでに貧困家庭や少数民族出身の100名以上の高校生に奨学金を給付してきましたが、この奨学金制度は生徒たちにどのような成果をもたらしたのでしょうか？また、どのような点を改善したら、よりよい支援ができるのでしょうか？

成果については次のような意見が出ました。「この制度のお蔭で早婚が減り、女子に教育の機会が与えられました」、「家庭や地域における女子のステータスが上がりました」、「私たちがテンプラス2（日本の高校2、3年生）に入ったことで刺激を受け、ドロップアウトする生徒の数が減りました。さもないと、殆どの女子は家の手伝いや早婚のために中途退学せざるをえなかったでしょう」、「奨学生から教師、協同組合職員、NGOスタッフになった人がいます。奨学生プログラムは、就業の機会も創り出してます」。

一方で改善点も見えてきました。それは、「国家試験で殆どの生徒が英語を落としています。原因は英語が早朝1時間目、バスの便がない時間です。遠距離通学の生徒は間に合いません」、「村には私たちの他にも奨学金を必要とする女子がいますが、人数が制限されているため、置き去りにされています」という意見です。

今回の集会在きっかけで、参加者の中から委員会が結成され、自分たちで大集会在開くことが決まりました。先輩たちとの交流から学ぶことが多いので、すべての奨学生と元奨学生にSNSなどで連絡を取ることにしたのです。

この大集会在は4月2日に開催予定でしたが、前日のロックダウンで延期になりました。再びの開催を待ちましょう。

小学校教師トレーニング

長期にわたる休校は、子どもたちにも影を落としています。せっかく定着した学習習慣が失われてしまった、情緒不安定な子どもたちや学校に来なくなった子どもたちがいる、など先生たちの悩みは尽きません。そんな状況を鑑みて「学びにおける子どもたちの感情や行動の問題」をテーマにワークショップを行いました。3校から参加した18名の先生たちに問題点を出示てもらったら19ありました。グループに分かれて解決策を考え、SAGUNがアドバイス。先生たちは問題のある子どもたちの家を訪問して、家族と話し合うと約束しました。



ワークショップで子どもたちの問題を話し合う

作文を書こう！

少数民族や女性など弱い立場にある人々の声は、なかなか中央に届きません。ともすれば置き去りにされがちな、このような人々の声を可視化しよう、とSAGUNと地球の木は地方情報誌『ロシラハール』を発行してきました。高校では作文コンテストを開催し、優勝者の作文を『ロシラハール』に掲載してきました。次は、小学校の先生たちの番です！

ところで、教師トレーニングに参加した先生や学校教育委員会の人たち20名に「これまでに作文を書いたことがある人？」と聞いたら、手を挙げたのは、たった一人でした。これでは生徒に教えることができません。恥ずかしくて縮こまっている先生たちに講師のカマルさんは、優しく言いました。「これまでに経験したこと、興味があること、なんでもいいから書いてごらん」と。7~8人の先生が作文を書いて送ると約束しました。

後日、「今度の『ロシラハール』に先生のいい作文が掲載されますよ」とマハントさんから嬉しい便りが来ました。

(ネパールチーム 乳井 京子)

2020年度の活動を振り返って

地球の木が支援しているJVCラオス(日本国際ボランティアセンター)からは毎年詳しい年次報告書が送られてきます。今回はこの報告書に基づき2020年度の主な活動をお伝えします。

サワンナケート県農村住民による自然資源の管理・利用支援プロジェクト

(2018年3月から3年の予定がコロナ禍で活動が遅れ半年延長)

【プロジェクトの背景】

ラオスでは人口の6割以上が農村部で生活し、豊かな自然に依拠した暮らしを続けている。近年ラオスはダム建設やプランテーションなどの開発事業により急速な経済成長を遂げたが、その一方、不当な土地収用や自然環境の破壊を招いており、農村部住民の生活基盤である自然資源や権利を守っていくことが課題となっている。

【主な活動内容】

① 村人による自然資源管理・利用のための仕組みづくり

支援村にコミュニティ林や魚保護地区を設置し、地図と使用規則を記載した冊子を作成して、行政に登録。また村境を明記した地図と使用規則を記した大型の看板を村内に設置した。

② 法律研修/ジェンダー研修

コミュニティ林や魚保護地区の設置に伴う森や土地に関する法律研修や、村人の自然資源に対する権利を伝える法律意識啓発カレンダーを活用した研修、女性の意志決定の場への参加などを学ぶジェンダー研修などを行った。

③ 村の基礎データの調査

村の伝統的自然資源の管理、利用などに関する基礎的なデータを収集・分析し、村人や外部者も理解しやすく使いやすい冊子を作成し、調査対象村に配布した。

村人の中に生まれた変化

- 3年前このプロジェクトで最初にJVCが手掛けたのは、村人たちと一緒に森を歩き、GPSを使って村境を含む正確な地図を作ることであった。ある村では、これまで送電線建設などで村の森が収用されても、区域が明確でなかったため、どこまでが村の森かを主張できなかった。しかし看板や地図でコミュニティ林の境を示せるようになったことで、外部者の不当な収用に対して反対しやすくなった。また樹種や林産物のリスト作りの過程で、外部の人にも森がどれほど村人にとって価値があるかを強調できるようになり、「補償金や土地借料について、これまで言い値通りにしていたが、これからはそうしない」と話すようになった。

- ジェンダー研修の参加者から、コミュニティ全体に関わる話し合いの席には夫婦で参加すべきという発言や、高額な買い物をする時には夫婦で話し合って決めるようになった。



(上) 魚保護地区の魚種を調べる (下) 森を歩いて村の地図をつくる

- 村境付近の土地では知らないうちに木が伐採されていることがよくあったが、看板を設置した村では、こうしたトラブルは認められなくなっている。また、村の地図を見て、自分たちで行う土地利用計画について「ここに道路を作るべきか」などと話し合いを始めた村も出てきている。

これらの事例のように、自然資源を守る具体的な仕組みを作ることで、人々の意識や関心が高まり、まだ散発的ではあるものの、外部への主体的な働きかけにつながっていく気運が醸成されつつある。また、行政に正式に登録されたことで、外部からの開発要請に対して行政側が、村との話し合いをするようにと指導するようになったとのこと。

JVCの重要な役割は村人の内発的、主体的な動きを後押しすることにあります。そして、地球の木の役割は、今までの経済一本やりの「開発」のみならず影の部分も広く知ってもらい、持続可能な未来につながる「より良い開発」とは何かを支援地の人々と共に考えていく事と思っています。

(ラオスチーム 中野 真理子)

CWCC(カンボジア女性緊急救援センター) 女性の人権が尊重される社会を目指して

まずはコロナの状況からご報告します。あれほど感染者が少なく、死者もゼロだったカンボジアですが、5月中旬、感染者は2万人を超え、死者も150人近くに急増してしまいました。4月1日からはプノンペンでは20時以降外出禁止、7日からは全土で州間の移動が禁じられ、病床が足りず、結婚式場が仮の療養施設となっています。地球の木が2014年から支援しているCWCCでもコロナ禍による生活困窮者に対して少額の資金援助を行いました。

会報誌では、地球の木が支援しているシェルターのサバイバーについての報告をお伝えしていますが、CWCCはカンボジア全体のジェンダー課題に幅広く貢献しています。

CWCCは1997年、3名の女性が、戦争そのほか様々な形の暴力により被害を受けた女性や子供たちのために立ち上げました。当時、カンボジアでは女性に対する人権意識がまだ希薄であり、女性への暴力やレイプは珍しいことではなく、田舎に住む女性が男性を訴えるということは村にはいられなくなる可能性がありました。泣き寝入りしているケースも多くあり、女性の意識改革と共に男性の意識改革が必要でした。

地球の木は、主にシェルターから自立する女性たちへの支援や、小規模な事業支援、またシェルター内の生活支援を行っていますが、CWCCの大きな目的は、性的な暴力を容認しないカン

ボジア社会の土台を作ることです。そのために法的な整備を含めた司法制度を作ること(裁判対応も含む)。そして政府機関や労働グループと協力しながらジェンダーに関する政策の改善や施行について提言活動を行うことをしています。特に大切なのは男性への教育で、暴力に訴えない、怒りを抑えるためのプログラムを行っています。

指導者層の意識改革、男性への教育、そして被害にあった少女たちには、ワークショップにより権利主張や男女平等の考えを伝え、女性が平和に安全に人権を享受できる社会の実現をめざしています。
(カンボジアチーム 成瀬 悦子)



CWCCのスタッフたち

第20回「南北 코리아と日本のともだち展」開催に寄せて



東アジア地域の平和を願って2001年にスタートした「ともだち展」は、2021年で20年目を迎えました。韓国、北朝鮮、中国そして日本、さまざまな国に住む子どもたちが“絵”を通じてお互いの日常生活や文化を知り、なかなか会えないけれど、人とひととのつながりを作っていくことを「ともだち展」は担っています。

日本でもソウルでも毎回、各国で同じテーマで描かれた子どもたちの絵が会場を埋め尽くします。そして、会えない人に向けてメッセージを書きあう場があります。いつもの場所でも工夫を凝らした展示がされ、「ともだち展」を支えるために多くの人が出会い、話し合い、「平和な未来を次世代に引き継いでいきたい」という強い思いの20年間の

試行錯誤があり、今に至ると思います。

昨年11月に「ともだち展」の韓国パートナー・NGOのオックドム主催の「東アジアの平和、市民と向き合う」という平和会議が開催されました。コロナ禍で直接会うことができなかったのは残念でしたが、私もソウルと日本を繋ぐ長丁場のその会にZoomで参加することができました。懐かしい顔に会い、懐かしい話を聞いて記憶がよみがえります。ソウルに何度か一緒に行ったことのある可愛い小学生だった子が、りっぱな先生になられ、また、素敵なお嬢さんに成長されていて感動しました。

国と国との大きな問題に振り回されながらも、交流を大切にす平和を願う人たちが、「個人と個人が知り合い、話をし、考える」、人に任せるのではなく「ともに生きていく」という、地球の木が大切にしてきたことが活かされているとしみじみ感じました。

今の社会情勢では人が集まって何かをすることは難しいですが、これからも多くの人に東アジアの平和を子どもたちに残していけるよう、「ともだち展」を楽しんでもらえることを願っています。
(理事 廣瀬 康代)

ミャンマーでのクーデターと日本の資金

メコン・ウォッチ 木口 由香

2月1日にミャンマー国軍がクーデターを起こしてから、この原稿を書いている時点でほぼ3カ月が経過した。既に、子供を含む750名以上の罪のない人が「治安部隊」に殺害され、3千人以上が不当に拘束されている。私たちは現実の出来事とは思えない市民への暴力を、SNSやTVニュースでほぼリアルタイムで見ている。国軍はアウンサンスーチー国家顧問を始めとする与党国民民主連盟(NLD)関係者を拘束、全権を掌握したと宣言した。しかし、立ち上がった市民の力強い非暴力の抗議運動と不服従運動により掌握には程遠い状況だ。

国軍は、昨年の選挙の不正等により国家の危機があった、とクーデターを正当化するが、信じる人は彼ら以外にいない。報道によると、国軍兵士には排他的な民族主義と、ミャンマー連邦を統一しているのは自分たち、という強い自負が教育で刷り込まれ、下級兵士すら家族と兵舎に住み一般市民と交流があまりないという。ミャンマーは構成民族が多い国で、そのうちいくつかは軍隊を有し、連邦からの自治や独立を求めて国軍と戦ってきた。この国軍と少数民族武装勢力との紛争は70年間、ミャンマーが「民政化」した後も各地で続いている。国軍はそういったグループから国を守っている、と自らの役割を位置付けてもいる。そのため、軍人やその指揮下にある警官らにとり、国軍に従わない市民は武装勢力と同じ「テロリスト」で殺害の対象となる。ロヒンギャ・ムスリム居住地域での国軍の行動で、2017年に70万人もの難民が発生したことは記憶に新しい。今、私たちが目撃していることは、実はミャンマーの各地で70年間続いてきたことなのだ。また、民主化運動の弾圧も今回が初めてではない。1988年の学生主導の民主化運動では、数千人が殺害された。弾圧には常に、可視化されにくい女性への性暴力をも伴っている。

それでも人々は立ち上がった。おそらくミャンマーで若年層が多いことが、今回の反クーデターが活発化するきっかけとなっている。弾圧された経験のないZ世代と呼ばれる若者たちが、自分たちの将来を奪われたことに怒り、SNSを駆使して抗議の意思を発信した。暗い軍政時代から民主的な時代を味わった上の世代もそれに呼応した。

実は、人々が使うインターネットのシステムの一部は、日本が政府開発援助(ODA)で改善したものだ。日本はミャン

マーへの最大の援助国で、ODAのうち借款の約束は1兆円を超えている。また、その他にも国際協力銀行(JBIC)という公的な銀行が、日本企業のミャンマー進出を支援している。日本の援助や投資はミャンマーの人びとに歓迎されたが、一方、国軍に利益をもたらした。私たちはクーデター前から情報を得て日本政府に対応を求めていた。

国軍は、国の予算以外の「財布」を持っている。二つの会社を所有し、百以上のその子会社を使いビジネスを行い、保有する不動産を外資に貸し出している。日本のODAで建設中のバゴー橋は、下請けにそのような国軍系企業が入っている。事業を進めれば、利益は国軍に流れてしまう。またJBICが融資したYコンプレックスと呼ばれる事業は、国軍の土地に建設され賃料が国軍に流れた強い疑いがある。更に今後、国軍が全権を掌握すれば、政府機関や政府系公社の収入も国軍のものになってしまう。日本の援助・投資事業は更に国軍ビジネスに巻き込まれていく。

今、ミャンマーの人たちは国軍の力を削ぐために、資金の流れを断つと欲しいと切実に願っている。事業を止めれば困る日本企業も出る。だが、事業実施が国軍の利益になれば、武器購入や軍事行動につながり、私たちも国軍の暴力に負担することになる。これまでわかったことは、メコン・ウォッチのホームページで紹介し活動もツイートしている。ぜひご一読いただき、皆さんからも日本政府に対し国軍を利する事業を止めるよう、声を上げていただけることを願っている。

(<http://www.mekongwatch.org>)



「メコン・ウォッチ」について

メコン・ウォッチは、東南アジアのメコン河流域の開発や経済協力が、地域の自然資源を生活の糧としている流域の人々の生活を脅かさないように、調査研究や開発機関への働きかけを主な活動として1993年に設立されました。地球の木と同じように会員やボランティアの多くの人に支えられています。また、以前からメコン・ウォッチの情報は地球の木の活動の参考にもなっています。

地球の木も[要請書]に賛同

メコン・ウォッチ等が呼びかけ人になった「日本の対ミャンマー公的資金における国軍ビジネスとの関連を早急に調査し、クーデターを起こした国軍の資金源を断つよう求めます」という[要請書]は、多くの団体の賛同を得て3月4日に日本政府へ提出されました。

事務局から

退職のご挨拶

竹内 千佳

2017年3月から4年間お世話になった地球の木を退職することになりました。

カンボジアが好き！という気持ちだけで面接にチャレンジしたのがつい昨日のことのようです。カンボジアにより深く関わただけではなく、ラオスやネパールのことも学べたことはとてもいい経験になりました。今はコロナ禍で現地訪問が難しいですが、一日も早く収束して、地球の木が再び現地で活動できることを祈っております。会員のみなさま、今後とも地球の木をどうぞよろしくお願いたします。

新スタッフ紹介

相馬 淳子



ご縁があり、4月より地球の木の事務局に入りました。夫の仕事の関係などで10年強アフリカ・アジアで暮らし、様々な民族や文化と出会い大切なことを教えていただきました。

今、地球の木の会報誌を創刊号(1999.12)から読ませていただいています。「地球上のすべての人たちと共に生きたい」。そのスケールの大きさを30年前から掲げ、継続している活動に圧倒されており。日本でご自分の家族や地域を大切に、その上で国境を越えた人へも繋がりを広げ、それを自分事ととらえてきた先輩方の姿が浮かびます。インターネットに頼らないころから、自分たちの足で活動をしている地球の木。その活動が途切れることなく続き、若い世代にも繋がっていくように微力ながらお手伝い出来たらと思います。



始めませんか ボランティアワーク



地球の木の活動は、皆さまの会費や寄付、そしてボランティアワークで支えられており、意思を持った人たちが自分のできることを通じてアジアの人たちと連携する組織です。設立から30周年を迎え、新たなプログラムを模索し前へ進もうとする私たちは、皆さまのお気持ちを十分活かせるよう支援も充実させていかなければならないと考えています。

そのために、ぜひ皆さまにボランティアワークのご協力をお願いしたいのです

関内事務所等で、お寄せいただいた切手やハガキ等の整理、またクラフトに関することなどに関わっていただけると大変助かります。海外支援チームへのご協力も大歓迎です。金曜日の午後にボランティア説明会を開催(不定期)していきます。皆様の興味のあることやご希望をお聞きますのでお話し下さい。参加の際は、事務所に電話かメールでご連絡下さい。

デポ一展示会

6月18日(金)～19日(土) 東戸塚



次号のお知らせ

次号は設立30周年記念の特集号。
秋の発行を予定しています。

活動日誌(3月～5月抜粋)

3月

- 20日 第11回定例理事会*
- 31日 海外支援検討会*

4月

- 17日 第12回定例理事会*
- 24日 期末監査

5月

- 8日 横浜市立平楽中学校出前講座
- 18日 第13回定例理事会*
- 18日 海外支援検討会*
- 30日 第22回通常総会*

*はオンラインもしくはオンラインを併用して開催



◆「クラフト (Craft) 事業」。和訳は手工芸品とか民芸品。元もとの意味は技術。手元にある「ボランティア活動・NPO用語辞典」には「事例がない!」。初版の年号は2004年。2年後に二版。その後は改定されていないのか、今さら確認するのも「大気ない」とそのままにした。それにしても地球の木の活動ぶりは中国の後漢書「楊彪(ようひょう)伝」からの言葉を借りれば、先見の明がある…。(の)



特定非営利活動法人
地球の木